

<かじやまち（岸和田中央商業協同組合）：岸和田市>

城下町の風情ただよう商店街

～懐かしい町並みを活かして人が集まる場所に～

取組みの効果

- ◆ 城下町にふさわしい趣きのある町並みの復活
- ◆ 「かじやまち亭」整備による集客機能の向上
- ◆ チャレンジショップや既存店舗の魅力向上により新規顧客を獲得
- ◆ 観光客や購買意欲の高い若い女性来街者の増加

取組みの内容

- ◆ 城下町の風情ある※ファサードを整備
- ◆ アーケード撤去で昔の町並みを復元
- ◆ 「かじやまち亭」を整備
- ◆ 魅力ある店舗展開で新規顧客を獲得

（※ファサード：建築物の外観）

取組みの背景

江戸時代、紀州徳川家と京・大坂を結んだ紀州街道に現存する石造りの「欄干橋」は、泉州地域で綿織物業が盛んだった頃、工場で働く女工さんたちが路線バスから降り立ち、かじやまち（当時は岸

〈商店街データ〉

- 所在地 岸和田市北町 9-16
- 店舗数 30店
- 問合せ 岸和田中央商業協同組合
理事長 江 勝富
Tel 072-422-2704
- URL <http://www.kajiyamachi.info/>

和田中央商店街)へと買い物を楽しみにやってくる入り口であった。

しかし、時代とともに産業構造や雇用形態が変化し顧客は減少。近隣に大型店舗が立地した影響もあり、商店街の賑わいは影をひそめていった。また、商店街も後継者不足等により営業店舗が激減し、空き店舗の増加が深刻な状況となった。



取組みのきっかけ

「たとえ時代が変わっても、伝統を重んじる城下町通りを守りたい」—そん

な組合員の思いを結集し、昔ながらの趣ある町並みの復元に向け、ファサード整備を計画したことがきっかけである。

この整備に伴って、40年以上受け継がれてきたアーケードも、城下町らしい町並みを活かすため、また、老朽化や維持管理費の増加もあり、惜しまれながらも撤去されることとなった。

平成15、16年の2カ年にわたる大規模な整備を経て生まれ変わった商店街は、名称を岸和田中央商店街から「かじやまち」と改め、新たな一步を踏み出した。



岸和田だんじり祭りの祭礼衣装が一式揃う「木島屋」。観光客に岸和田らしさを伝えるショップの一つである。

活性化の要因

- ◆協同組合（法人組織）の組織力
法人組織として商店街への補助制度を最大限に活用できた。
空き店舗の地主・家主との折衝等も、信頼のおける組合が行うことにより円滑に話を進めることができた。
- ◆レンタルスペースの低価格設定
貸室料や家賃で収益をあげることを目的とせず、気軽に継続した利用がし

やすい低価格で提供することにより、稼働率が向上。結果として開業以来黒字運営を維持しており、シャッターが開いている。

◆新規顧客の開拓

既存の物販店舗が若い女性をターゲットにカフェを開店したところ、雑誌に掲載されたり、お客様が自身のブログで紹介するなどうまく情報発信ができた。現在は商店街への集客の核店舗として活躍している。



老舗呉服店がオープンした「きものとかふえいなばや」かじやまちへ来たならここというファンも多い。

かじやまち亭の活動

◆かじやまち寄り合い◆

1階部分のチャレンジショップでは、何かを始めたい人を商店街が応援。着物リメイクのお店や癒しカフェなどのオーナーが商店街の一員となった。

○チャレンジショップ

賃借料 月23,000円

◆かじやまちレンタルスペース◆

2階の大部屋と小部屋をリーズナブルな価格でレンタル。



毎週恒例の着付け教室、ヨガ教室のほか、**JAZZ**ライブや手作り作品展示会など短期の需要も多い。

○かじやまちレンタルスペース

レンタル料 1日 **1,500** 円

◆かじやまち亭講談寄席◆

平成 19 年 12 月から、毎月 20 日を『講談の日』とし、商店街主催で旭堂一門による講談を上演している。(定員 25 名)

○入場料 **1,000** 円(前売り **800** 円)



戦記物や地元ゆかりの物語を間近で堪能できる「かじやまち講談寄席」

取組み上の工夫や苦勞

商店街には依然として空き店舗が目立ち、空き店舗は立地の良さから住宅用地として売買され、やがて商店街は住商混在型の町へと変貌していった。

しかし、「商店街に人が集まる『まち』の役割を取り戻そう」という思いから、住宅地として売却されようとしていた町屋を協同組合が買い取り、平成 20 年

8月に「かじやまち亭」を開設した。

当初は、かじやまち亭講談寄席の集客とレンタルスペースの利用促進に注力し、近隣の飲食店にポスター掲示やチラシ配布等の協力をお願いした。

あまり広報をすると、定員 25 名の会場で対応できなくなるため、そのさじ加減が難しかったという。

かじやまち亭は現在、大阪ミュージアム構想の展示品としても登録されている。



木の香りが心地よいかじやまち亭

めざす商店街像（今後の展望）

商店街としての存在感をどこまで維持できるのか、町の風情を活かした集客を、今後、いかに仕掛けていくかが課題らしく、また、周辺商店街とも連携し、「面」としてより効果的に岸和田市の中心市街地を活性化していきたいとのこと。

こぼれ話

「この町を訪れてくださる方やコンサ

ルティングの専門家から、この町の雰囲気には大人向けのバーが似合うんじゃないですか？というお話をいただくことがあります。私もお酒は好きなので

『あったらええな』
と思うこともありますが、やっぱり昼間に商店街のシャッターが閉まっていることは望みません。



私たちの商店街には、結納用品、呉服、家具や祭礼衣装など、晴れの日を彩る商品を扱うお店が並んでいます。町の華やかさを絶やさないうため、シャッターを1枚でも多くあげていきたい。そこは譲れないんです。」(江 勝富 理事長)

取材を通して

「奔走する」という言葉を体現しているのがかじやまちの皆さんだと思います。

大規模なハード整備は、業者に発注して終わりではない、というお話を伺いました。周辺住民や組合員への説明と説得を粘り強く繰り返し、組合の費用負担を少しでも軽減するために何度も仕様書を見直し、補助金の申請のために幾度となく役所へ足を運び、工事が始まってからも役員が交代で徹夜のクレーム対応。

「あの頃は商売をしてませんでした。商店街のためだけに働いてましたから。」と江理事長が笑顔で語る姿に、“商店街の問題は商店街だけの問題ではな

い”という現実を垣間見ました。

商店街とは、単なる商売上のつながりにとどまらず、街そのものを演出する巨大な装置です。「いらっしゃ〜い」「安いよ〜」と威勢のいい声が飛び交う場所であったり、かじやまちのようにしっとりとした雰囲気を演出できた場所がある一方で、シャッターが閉まりきったままで活気が途絶えてしまった場所もたくさんあります。かつてのかじやまちがそうであったように、「シャッターを1枚でもあげていきたい。」という強い気持ちを実現していける仕組みが必要だと感じました。